

平成 20 年度

台渡里廃寺跡長者山地区  
範囲確認調査現地説明会資料



2009 年 3 月 15 日 (日)

13 : 00 ~

水戸市教育委員会



## 1. 調査の概要

調査名 台渡里遺跡群第 48 次調査  
調査地域 水戸市渡里町 3146 外  
調査対象 台渡里廃寺跡長者山地区（含 No.025 長者山遺跡範囲内）  
調査目的 史跡範囲（那賀郡衛正倉院推定地）の確定  
調査主体 水戸市教育委員会  
調査期間 2008 年 10 月 21 日～ 2009 年 3 月 20 日  
調査面積 約 530 m<sup>2</sup>

## 2. 調査の経過

台渡里廃寺跡（だいわたりはいじあと）は、那珂川右岸の標高 31～34m の台地上に位置する古代常陸国那賀郡の役所と役所に関連する寺院が複合した遺跡です（第 1 図・第 2 図）。北から長者山（ちょうじゃやま）地区、観音堂山（かんのんどうやま）地区、南方（なんぼう）地区に分けられており、平成 21 年 3 月現在は、観音堂山地区と南方地区が国の史跡に、長者山地区の一部が県の史跡に指定されています。

長者山地区では、戦前に行われた高井悌三郎（たかいていざぶろう）氏の調査（第 3 次調査）や昭和 48 年の水戸市教育委員会の調査（第 7 次調査）では、瓦葺きの礎石建物跡が 4 棟見つかっており、那賀郡内の地名や人名を記した文字瓦が多数出土しました。これらの知見により当時から那賀郡衛の正倉院（租税として集めた穀物を収納しておく倉庫群）と考えられていました。

昨年度の 38 次調査および一昨年度の 30 次調査により、県指定史跡の範囲も含めて調査を進めていった結果、正倉とみられる同じ規模の礎石建物が整然と立ち並び、これらの倉庫群の北側と南側を取り囲む溝跡を確認されました（第 3 図）。そのことから、水戸市教育委員会では、当地区を那賀郡衛正倉院と推定し、これが現在の県指定範囲を超えて広がることを予測しました。今年度の調査は、昨年度の調査を受けて、正倉院の東側を区画する溝を特定し、史跡の範囲を明確にすることを目指して行いました。

## 3. 調査の成果

### （1）発掘前の地下探査と微地形調査

台渡里廃寺跡長者山地区のように奈良・平安時代の郡の役所に伴う正倉院は、広大な範囲に展開している可能性が高いことから、今年度はやみくもに発掘を行うのではなく、事前に地下に埋没している遺構を調べる地中レーダー探査という科学的な手法を導入して、発掘調査にのぞみました。

地中レーダー探査は、魚の群の居場所を調べるために使用する魚群探知機と仕組みが似ています。魚群探知機から超音波を海の底に向かって発信します。超音波は、海底の方に向かって伝わっていきませんが、途中で何か物体に当たると反射し、その反射した波の一部は発信した機械のところまで返ってきます。それによって、何メートルの深さのところにどれくらい大きい魚がいるのかが調べられます。同じように地中レーダーは、機械から電波を地下に発信して、地下の様子を調べます。この機械を使うと、深さ何メートルのところにどのような遺構があるのか、どのような種類の土が埋まっているかなどがわかります。

平成 20 年 5 月 19 日～ 23 日に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室の協力を得て、地中レーダー探査を実施しました（写真 1）。その結果、正倉院の東側を区画すると見られる溝や溝の外側に掘立柱建物の柱穴などが埋まっていることを確認することができました（第 4 図）。

また、地中レーダー探査を実施していたところ、溝が確認された場所が帯状に窪んでいることが確認され、微地形調査（人為的な地形改変に起因して地表面に現れる僅かな起伏を非常に細かい精度で測量する調査方法）も実施しました。微地形調査は、有限会社三井考測の協力を得て、平成 20 年 8 月 2 日・7 日・26 日に実施しました。

その結果、今回の調査区の西側には約 8m の幅で南北に広がる 10cm の窪地となる等高線群と平行する幅の狭い溝状等高線が見られることが確認されました（第 5 図）。地中レーダー探査の結果と照合したところ、これは溝状の遺構が地下に埋没していること、一辺が 10m 四方の竪穴住居跡が地下に眠っていることに起因していることが判ってきました。

また、南東には屈曲と迷走する等高線が観測され、西側と同様に地下に溝状の遺構が埋没していることに起因していると考えられます（第5図）。

微地形調査で確認された地形の凹みは、地中レーダー探査で確認された遺構の位置とほぼ重複していることから、地下探査と微地形測量を組み合わせることにより、調査範囲をピンポイントで限定することができました。

## （2）縄文時代と古墳時代の集落

今回の調査区は長者山遺跡という縄文時代中期の集落跡と重複しているため、縄文時代に掘削された貯蔵穴とみられる土坑や竪穴住居跡が見つっています。これらの遺構からは多数の縄文土器や石器、土製品などが出土しています。また、最も北側の調査区からは、古墳時代前期（4世紀末頃）の竪穴住居跡が見つかり、完全に近い状態の甕形土器（かめがたどき）も出土しています（写真2）。これらの遺構から、奈良時代に役所が造営される以前には、集落が営まれていたことが判ってきました。縄文時代から非常に住みよい土地だったのでしょう。

## （3）正倉院の東限が確定

今回の調査では正倉院の東側を区画する溝を確認しました（第5図・写真3～4）。これまでの調査成果も含めて、那賀郡衛正倉院は、内側の幅が広い溝と外側の幅が狭い溝の2つに取り囲まれていることが判明しました。内側の溝は東西250～270m、南北140～200mの範囲を圍繞しており、外側の溝は東西280m～310m（推定値）、南北160～200m（推定値）の範囲を取り囲んでいるとみられます。

両溝に堆積している土の中からは灰釉陶器（かいゆうとうき）の破片や瓦が出土していることから、9世紀後葉頃までには埋没していたとみられ、2つの溝は同時期に存在していたと考えられます。二重の区画溝によって囲まれている正倉院は全国的にも例が無く、大変珍しい事例です。

## （4）正倉院の外側にある掘立柱建物

北側から2番目の発掘区では、正倉院の外側を区画する溝のさらに東方で掘立柱建物の柱列が確認されました（第5図・写真5）。この掘立柱建物は柱と柱の距離が2.1m（7尺）で、地中レーダー探査の結果から桁行3間、梁行3間の総柱式（そうばしらしき）掘立柱建物（壁際だけでなく、全ての位置に柱を持つ高床倉庫）とみられます。中世の溝跡によって柱穴の1つが壊されていることから、奈良時代の掘立柱建物であることが判りました。柱穴を調査したところ、柱の周囲に丸い川原石が円形に配置されていました。この石は、柱の腐食や倒壊・湿気等を防ぐために据え置かれたものと考えられます。

## （5）人為的に埋め戻された中世長者山城の堀を確認

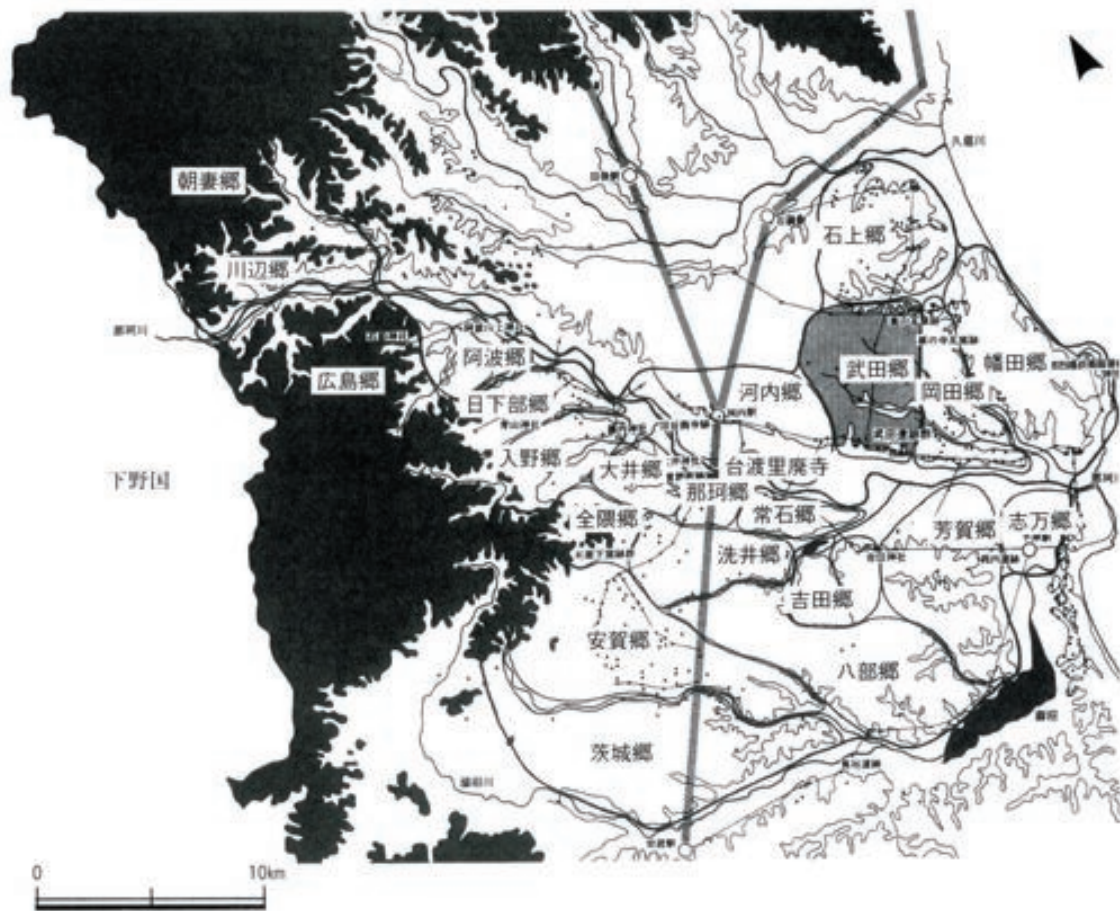
今回の調査では中世の長者山城に関連するとみられる堀跡も確認されました。南東の調査区で確認された溝の規模は上面幅8.0mで深さは2.7mもありました（写真6）。溝の中に堆積している土は自然に埋没したものではなく、内側から粘土や関東ローム層の塊がたくさん混じった土で一挙に埋め戻されていました。これはこの溝を掘削した際に発生した土を内側に土塁状に積み上げて、それらを崩して埋め戻した結果と考えられます。溝の中からは、中世に使われた土鍋やカワラケなどの破片が出土したことから、長者山城に関連するものであることが確認されました。

## 4. 調査の課題

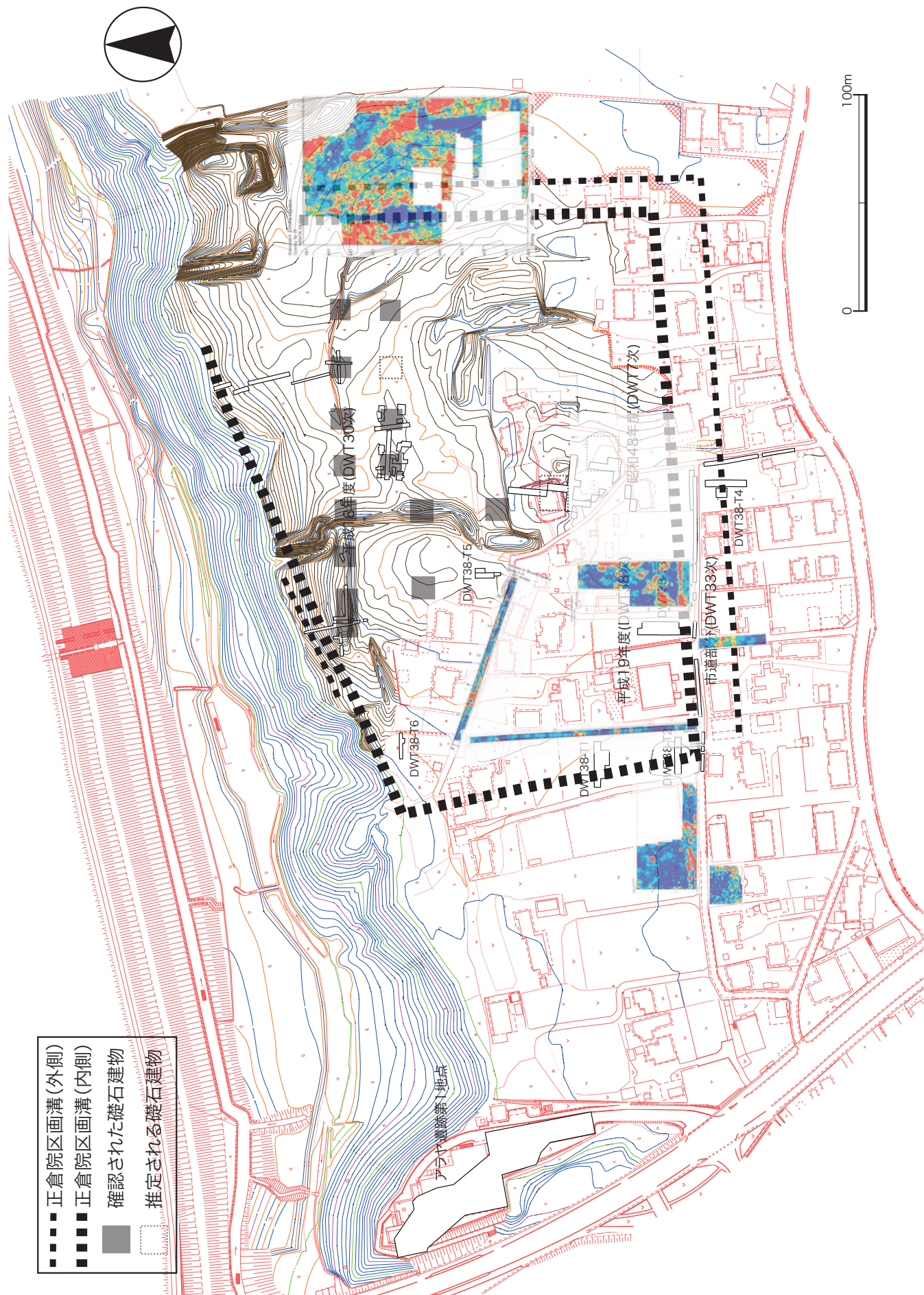
今回の調査と平成18・19年度の調査で正倉院の南北と東側の限りをほぼ確定することが出来ましたが、西側についてはまだ範囲が確定していません。国史跡への追加指定を行っていくためにも来年度も引き続き、西側の溝を探索するための調査を行う予定です。



第1図 台渡里廃寺跡長者山地区の位置

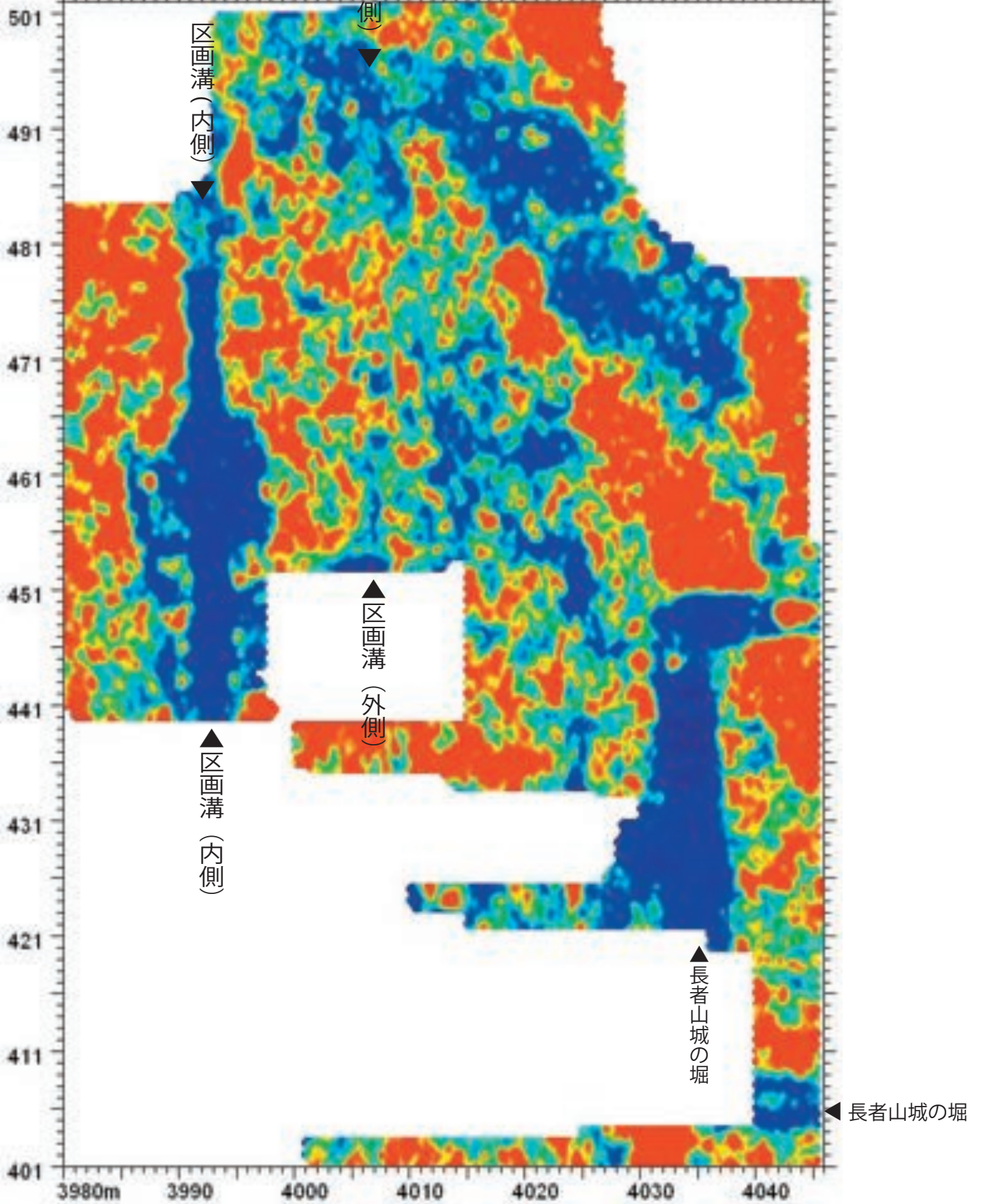


第2図 奈良・平安時代の那賀郡の郷と遺跡分布

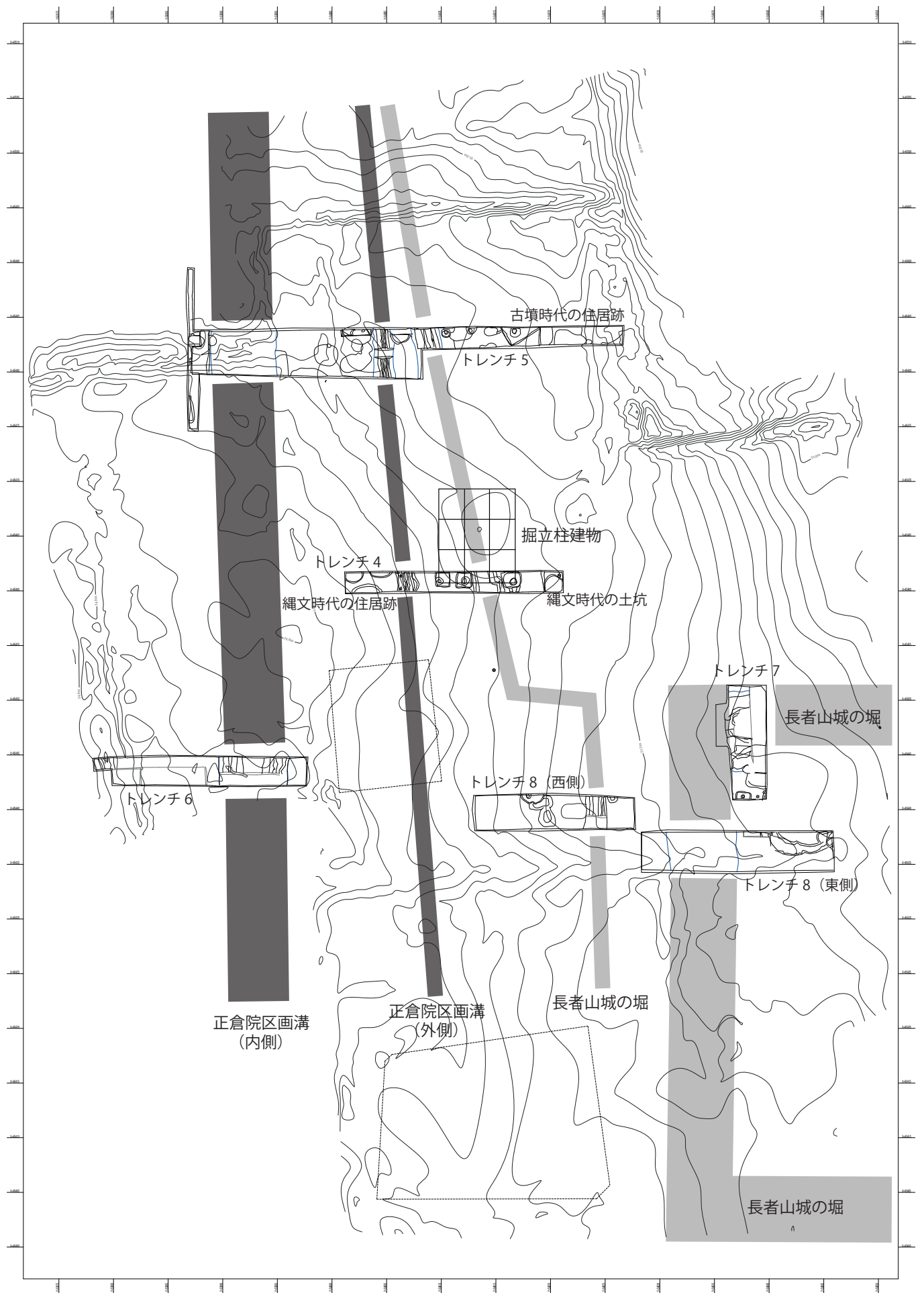


第3図 既往の調査成果と正倉院の推定範囲

Daiwatarl-6 200MHz Migration  
Overlay 14-19  
ImMa18: 84-93ns



第4図 地中レーダー探査の結果（深さ 2.4m ~ 2.7m）



第 5 図 発掘調査で確認された遺構





写真1 地中レーダー探査風景



写真2 古墳時代住居跡土器出土状況



写真3 正倉院区画溝（内側）土層断面



写真4 正倉院区画溝（外側）土層断面



写真5 掘立柱建物の柱の周囲に配置された円礫



写真6 人為的に埋め戻された中世の堀跡

平成 20 年度  
台渡里廃寺跡長者山地区  
範囲確認調査現地説明会資料

印刷 平成 21 年 3 月 14 日  
発行 平成 21 年 3 月 14 日  
発行 水戸市教育委員会